

和歌山大学と その周辺の生き物たち



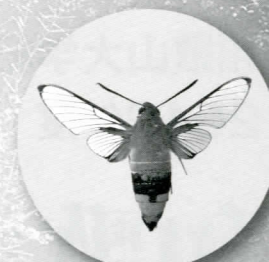
キビタキ



イソヒヨドリ



コクワガタ



オオスカシバ



カナブン



シロスジナガハナアブ



モンキアゲハ



オオタカ



アゲハ

1984年に教育学部が、そして1987年に経済・経済短期大学部および附属図書館中央館が栄谷の地に移転してから28年が経過しました。この移転統合に際しては、約10万坪におよぶ周辺の里山を切り開き、谷を埋める大規模な開発がおこなわれました。

しかし、周辺には里山が残されており、梅原・向等周辺地域には多くの水田が営まれていて、都市近郊としては豊かな自然が残されていました。学内にはイノシシを始めとして、タヌキ・アナグマ・ニホンリス・ノウサギ・ヒミズ等の哺乳動物が生息し、今では絶滅危惧IA類に指定されているヨタカも毎年飛来していましたし、アカショウビンが立ち寄ったこともありました。

植物も、キンランやギンランをはじめ、和歌山県内で4か所しか記録されることがないホンゴウソウも生育していました。

しかし今、周辺の大規模開発やそれに伴う環境の変化に伴って、大学及びその周辺の生き物たちは大きくその姿を変えようとしています。今回は昆虫・鳥類そして高等植物の展示になりますが、改めて大学周辺の環境を見つめなおす契機となればと思います。